

年間第十五主日（主日の福音を中心とする「霊的な読書」）

（一）聖書朗読：マタイ 13：1-23

イエスは種を蒔く人のたとえを言われた：種を蒔く人が種をまきに出て行った。ある種は道端に落ちた。これは御国の言葉を聴いて悟らなければ、悪い者が来て、心の中に蒔かれるものを奪い取る人である。ほかの種は石だらけで土のぐない所に蒔かれた。これは、御言葉を聞いて、根がないので、艱難と迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう人である。ほかの種は茨の間に蒔かれた。これは、御言葉を聞く人が世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人である。ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んでいた。これは御言葉を聞いて悟る人である。イエスはたとえを用いて、天国の秘密を説明したが、この民の心は鈍り、見ても見えず、聞いても聞けず、理解せずに、イエスは彼らを癒さに来られた。

（二）カテキズムの響き：カトリック教会のカテキズムの番号 #101-102、546、2652-2654； YOUCAT #10、20、89

人は、土のように、み言を堅い土のように受け入れるか、それとも、良い土のように受け入れるか、いただいたタラントンで何をするのか、と問われます。実は、み言が始めにあった、み言は神であった。限りない慈悲である神が、人間にご自分を啓示するため、み言としての受肉したキリストによって、人間の言葉で語られます。さらに、今日、聖書のあらゆる言葉を通して、私たちに語られます。聖書において、イエスはたとえ話を通して、神の国に入るよう促しておられます。み国に入ることは、つまり、キリストの弟子となる必要がある。そうでなければ、天の国の秘密（マタイ 13：11）を悟れません。外にいる人々には、すべてがなぞのままです。

そのために、教会はすべてのキリスト者がしばしば、み言としての聖書をひも解いて、生きた水を汲み取り、実を結ぶように強く勧めます。聖書を読むにあたっては、神と人間との会話ができるよう、それに祈りを加えることを忘れてはなりません。なぜなら、私たちは祈る場合は、神に話しかけ、神の言葉を読む場合は、神の話を聞くということである。祈りの中で神の言葉に養われる心のあり方は、読みながら祈り、祈りながら門をたたくことです。そうすれば、黙想によって門があなたに開かれるでしょう。

（三）カテキズムの学び（『コンペンディウム』カトリック・カテキズム要約の番号）

- #107 イエスが神の国を告げ知らされること：
イエスは神の国に秘密を啓示されて、すべての人を招いて、回心して、謙虚な心で御父の限りない慈しみを受け入れるよう呼ばれています。
- #558 キリスト教の祈りについて：
祈りの源泉は神の言葉、教会の典礼と対神徳です。この源泉によって、日常生活の中で、私たちがその中で神と出会うことができます。

最後の祈り：共同祈願の後、主日の集会祈願をもって、祈りを終えます。